

歴史人口学からみた生と死 六

鬼頭 宏



五、出産と子の成育（承前）

(五)

ために、妊娠を有効にかつ安全に制限できなかつたことがあげられる。

江戸時代の夫婦が多産であつた、というよりそうでなければならなかつたのは、どうしてなのか。それには三つの理由が考えられる。

次いで少なくとも後継ぎの男子を持つこと、できればなるべく多くの子を持つことが望ましいといふ、現代とは全く異なる価値観が支配していたことである。子孫が絶えることを惧れる古くかららの感情、家の継承を重んじる風潮、そして老いた親の扶養や一族の生活安定のために多産が必要とされた。

しかしこのようなことがらは、からならずしも多産でなければ満たされないわけではない。江戸時代の平均余命をみたときに示唆ます消極的な理由として、避妊の知識と確かな技術がなかつた

したように、生後間もなく死んでしまう子が多く、成年に達する子が少ない、生存が不確実な社会だったことから、家を継ぎ、次代を担う者を得るために多くの子を産んで危険を避ける必要があったのである。

今回は、人生の初期に起る生命の損失がどのようなかたちで、どのくらいの頻度であったかをみるとしよう。史料の性質上、(1)出生以前の死亡（死産）、(2)宗門改帳に登録されるまでの乳児死亡、(3)宗門改帳登録後発生する数え年二歳以後の幼児死亡に分けて、出生児の成育過程を観察する。

(六)

乳児死亡率は社会・経済の近代化をはかる重要な尺度であるが、現在、わが国の乳児死亡率は世界でももつとも低い水準にあり、幼ない命の犠牲が少ない国の一いつになつていている。しかしそれはほんの少し前に達成されたのであって、一九世紀まで瀕れば、現代の発展途上国なみの高水準にあった。

江戸時代の死産と乳児死亡を示す例として、表5に一九世紀初期の陸奥国中石井村（現福島県）における出生児の経過を示してある。

ここでは二七一件の出産のうち死産と明記されていたのは二一一

件で、死産率は出産千につき七八となる。経過不明の九件を加えると死産率は一〇〇ペー・ミルを超えてしまう。飛驒の寺院過去帳から算出された数値も、多少の記録漏れがあるとされるにもかかわらず七一ペー・ミルあり（須田一九七一より算出した一八〇一～一九〇〇年の平均値）、出産一千〇〇件のうち一件は死産という状態が、江戸時代後半の姿だったと思われる。

高い死産率の背景には、妊娠にとって厳しい労働環境、栄養の不足、母子衛生への無関心といった問題があるほかに、出生制限、すなわち間引きによる死亡もある。

表5 出産児の経過（陸奥国中石井村、1808～26年）

性別	出 産				乳児死亡	死産率	乳児死亡率
	出 生	死 産	不 明	合 計			
男	117	3	0	120	25	25	214
女	113	10	0	123	15	81	133
不明	11	8	9	28	3	286	273
合計	241	21	9	271	43	78	178

(1) (鬼頭 1976) による。

(2) 死産率は出産1,000につき、乳児死亡率は出生1,000についての件数。

表6 生存期間別乳児死亡（陸奥国中石井村、1808～26年）

生存期間	乳児死亡	構成比	死亡確率
4週未満	16	50%	89%
3カ月未満	9	25	49
6カ月未満	4	14	29
9カ月未満	2	7	15
1年未満	1	4	8

(1) (鬼頭 1976)による。

(2) 期間不明の11件を除く。

(3) 死亡確率は構成比とともにとく推計値。

隠されているにちがいない。
 九ヵ月を胎内で過ごして、ようやく無事に出生したとしても、その後の安全な成育が保証されていたわけではない。満一歳を迎えるまでの人生の最初期には、さらに大きな難関が待ち構えていた。

中石井村の懷妊書上帳には出生千につき一七八の乳児死亡が記録されており(表5)、飛驒の過去帳によれば一九世紀の乳児死亡率は二二八ペー・ミルだつた(須田一九七一より算出)。小集団の統計に

つきもののバラツキを考慮しても、出生児の二〇%以上は一歳未満で死亡していたことになり、乳児の生存がいかに困難だったかない。

九ヵ月を胎内で過ごして、ようやく無事に出生したとしても、その後の安全な成育が保証されていたわけではない。満一歳を迎えるまでの人生の最初期には、さらに大きな難関が待ち構えていた。

つきもののバラツキを考慮しても、出生児の二〇%以上は一歳未満で死亡していたことになり、乳児の生存がいかに困難だったかない。

乳児死亡の態様についていくつかの角度からみてみよう。

まず、中石井村の記録から生存期間別に乳児死亡をとりあげたのが表6である。生存期間不明のうち八件は十一月と十二月に生まれた者で、年が明けてから日数が経って死亡したケースと考えられる。したがって月齢の若い死亡が強調されている傾向は否定できないが、出生後四週未満の死亡率がきわめて高く、生存期間が延びるにつれて生存の確率が高まっていくことが明らかである。このパターンは、死亡率の水準こそちがえ、現代にも共通している。

次に死亡の季節性はどうだろうか。中石井村の場合、死亡月にははつきりした季節性を認めることはできないけれど、春季(現行暦三～五月)出生児の死亡率が最も高く(二三三ペー・ミル)、次いで冬季(十二～二月)出生児(一七二ペー・ミル)だった。北関東の事例(鬼頭一九七三)では、死産と乳児死亡を含む死亡数は旧暦六・七月および十二～三月の二つの山があった。このように、ごく僅かな例からではあるが、一九世紀に乳児死亡は夏と冬に集中していたことが示唆される。

乳児死亡の季節性は、病気の性質、それを助長する生活環境、そして農業労働を中心とする生活のリズムによつてもたらされたのだろう。

畠山政子（一九七二）は現在と二〇世紀初頭では「季節病カレンダー」が大きく相違することを明らかにしているが、乳児死亡についてみると、最近は十二月から三月にかけての冬季に集中が著しいのに對し、二〇世紀初頭には冬季とともに夏季の山が著しく大きかった。これは現在も八〇年前にも、乳児死亡原因として肺炎・気管支炎と下痢・腸炎が共通して重要だったが、現在はどちらも冬季の疾病であるのに対し、八〇年前には下痢・腸炎が夏季のものだったという違いによつている。

江戸時代にも、非衛生的な水と食事は夏の下痢・腸炎を多発させ、粗末な衣服・栄養と不十分な暖房が冬の肺炎・気管支を助長したことは推測に難くない。

(七)

数え年二歳以上の幼児、小児の人口学的経過は宗門改帳の追跡調査によつて、比較的容易に知ることができる。その一例として、木曽湯舟沢村で一七三一～六一年に生まれた子の人口学的経過を表7に掲げた。

表7 出生児の人口学的経過（信濃国湯舟沢村、1731～1762年出生者）

性別	出生児	死亡・他出(他出)		11歳時 在村者	結婚		他出・死亡 11～30歳	31歳時 未婚者
		2～5歳	6～10歳		村内	村外		
男	163	28(2)	6(2)	129	87	4	30	8
女	133	14	8(3)	111	74	21	11	5
合計	296	42(2)	14(5)	240	161	25	41	13

表によると、二歳から五歳のあいだに二九六人のうち二人が他出し、四〇人が死亡している。したがつてこの年齢層での死亡率は一四%にのぼる。六一〇歳の死亡率は急激に低下して四%、一一一五歳では三%になる。

このように五歳以下の幼児死亡率がかなり高い現象は他の地域でも同様で、二〇%から二五%の死亡率はふつうに観察されている。宗門改帳に現われてこない乳児死亡を考慮すると、出生児のうち六歳を無事に迎えることができるのは十人のうち七人以下、一六歳までの生存率は六人以下ということになつてしまふ。なんと大きな損失だろうか。

飛驒の過去帳は、一八世紀末から一九世紀ながままでの十歳以下的小児の死亡原因として「虫」「疽虫」「驚風」などと呼ばれる小児病を多くあげている（須田一九七一）。それが具体的に今日のどのような病気をさすのかよくわからないが、それに加えて成人の死因として比重の大きい、痘瘡、痙攣、傷寒、麻疹なども、單に「病氣」とされる中に含まれていたと考えられる。

死亡率の高低には育児に対する関心や熱意、あるいは経験による子の取扱い方の相違が反映していると考えられる。それは死亡率の男女差や出生順位による差を生んでいるだろうか。

中石井村の死産率をみると男よりも女が高い（男二五、女八

一）。女児に対する間引の選択的実行があつたのだろうか。しかし、性別不明の死産が多いことを考えると確かなことは言えない。これに対し乳児死亡率では男の方が高くなっている。

一一五歳の幼児の死亡率は、これまで知られている諸地域では男女差はあまりないか、若干、女児の方が低いようである。湯舟沢村でも男一六%、女一%で、女児の方が育てやすかつたようである。

出生順位および出産時の母親の年齢と死亡率の関係は複雑で、一般化することは難しい。乳児死亡率を中石井村の例でみると、出生順位とは関連が薄く、母親の年齢とは、四〇歳までは死亡率が低下する傾向があつた。

五歳以下の幼児死亡率は出生順位がおそいほど、また母親の年齢が高くなるほど高くなる傾向があるようと思われる。しかし、どこでも共通しているのは第一子、および一六一〇歳の母親が産んだ子の死亡率が、明らかに他群よりも低かったことである（たとえば速水（一九八〇）による濃尾地方農村の例）。

出産とその生存が子にとって不確かであつたように、母親にとっても出産は危険に満ちていた。飛驒の過去帳で一一一五〇歳の死因（男女合計）をみると、一二%を産後死および難産死が占めている。女子に限れば、それは四分の一を上まわっていたことだ

表8 出生と妻の死亡の関係（信濃国湯舟沢村、1701～50年結婚ヨーホート）

有配偶期間	出生なし	出 生 あり				合 計
		出生と同年	出生1年後	出生2年以上	小計	
10年以内	6	7	4	2	13	19
11～20年	1	2	4	8	14	15
21年以上	1	1	0	20	21	22

(注) 妻の死亡によって結婚が終了した56例を対象とした。

らう。

表8に湯舟沢村の妻の死亡と出産の関係を示しておいた。若い妻ほど、出生のあつた年の死亡が多いことがわかる。有配偶期間が一

〇年以内の場合、出生経験者の五四%が子の出生と同年に、三一%が翌年死んでいる。出産との関連が強く推測される例である。

平均余命を検討したときにも(第三回)、出産期間の女子死亡率が高いことを指摘しておいたが、このように妊娠や出産に伴なう危険が、多くの母の命を奪つていたのである。

最後に、なぜ江戸時代の夫婦が多産でなければならなかつたのかという冒頭の問題を、人口再産の面から解いてみよう。

表7から、人口維持をはかるのに必要な夫婦あたり出生数を計算すると次のようになる。男女ごみで二九六人の出生児は、死亡または他出によつて年々減少し、一一歳時の残存者は二四〇人

(出生児の八一%)だつた。これは他の地域の五〇～六〇%と比べると条件が良いと言える。このうち一六一人が三〇歳までに村内で結婚した。この一六一人で同世代(二九六人)と同数の次世代を再生産しなければならないなら、一人あたり一・八四人の同性の子を持つ必要がある。したがつて、夫婦あたりの出生数は(出生性比を親世代と同じだとすると)四・一四人となる。

一見したところ平均四人強の子どもを持つばよいのだから、たいした問題はなさそだが、実際にはかなりたいへんなことがあつた。ことに女性にとって負担が大きかつたと言わざるを得ない。

湯舟沢村の女性は平均二〇歳で結婚したが、年齢別出産率にしつかつてしまつ。さらに出産期間の途中で死亡したり離別したまま再婚しない女性もいることを考えると、完結家族の出生数はもっと多くなければならず、したがつて最終出産年齢も遅くならざる

(八)

をえない。

なお、この四人強の出生数は数え年二歳児の数なのだから、乳児死亡と死産を加えた実際の出産回数は六～七回を下らないといふことも加えておこう。

このように女子の再生産可能年齢の大部分を費やして出産を続けなければならない社会では、出産力の大きさと死亡率の高さは、個々の家の継承にとって決定的な要因となってくる。武藏国甲山村（鬼頭一九七八）や美濃国西条村（速水一九七三）で見られたように、出産率の格差はそのまま子孫の出生数にも差をもたらし、数世代のうちには上層農家では分家による世帯増加を、下層農家では絶家による減少を促すことになるのである。

（上智大学）

〔参考文献〕

速水融 一九七八 「人口学的指標における階層間の較差——濃州西条村の農民——」徳川政史研究所『研究紀要』昭和四十八年度。

速水融 一九八〇 「近世濃尾地方農民の人口学的観察——四六〇〇組の家族復元を通じて——」徳川政史研究所『研究紀要』昭和五十四年度。

鬼頭宏 一九七二 「懷妊書上帳にみる出産と死亡——幕末(

明治初頭の北関東における事例——」『三田経済学研究』六号。

鬼頭宏 一九七六 「徳川時代農村の乳児死亡——懷妊書上帳の統計的研究——」『三田学会雑誌』六九巻八号。

鬼頭宏 一九七八 「徳川時代農村の人口再生産構造——武藏国甲山村・一七七七～一八七一年——」『三田学会雑誌』七一巻四号。

糀山政子 一九七一 「疾病と地域・季節」大明堂。

須田圭三 一九七一 「過去帳を通して観察した飛騨村落における徳川中期より現在に至る衛生統計について」私家版。

